

論文審査結果の要旨

本論文について、令和8年2月2日午前10時から12時にわたり、京都府立大学文学部会議室において公開審査会を実施した。参加者は審査員を含めて5名である。最初に本人より提出論文の概要について発表があり、その後、審査委員や会場参加者による質疑がおこなわれた。質疑のおもな内容は、以下の通りである。

【全体】

- ①査読紙に掲載されている論文（第2・4章）に比べると新稿（第1・3・5章）が十分に推敲されていない。
- ②誤字脱字は少ないが、体裁やレイアウト、図表の提示方法などに不備が散見される。
- ③出土資料の考古学的分析に基づく内容ではあるが、当時の歴史的背景と接続する際に、日本の東洋史・中国史（文献史学）に関する基本的な理解が不足している。

【序章】

- ④時代区分と時期区分について、すべての分期が王朝区分をベースとしているが、そういった政治史的区分と出土資料にもとづく文化史的な区分は対応しないこともあるのではないか。
- ⑤研究史が個別の課題を指摘するだけに留まっている。まずは先行研究の到達点を示した上で、残された課題を浮き彫りにし、本論文の目的を定める必要があるのではないか。
- ⑥魏晉南北朝時代の青銅製容器について「この時代の社会的・経済的側面、さらに文化的側面を示す有効な資料である」としているが、本論を通じてそれぞれ何が明らかとなったのか終章にまとめがない。

【第1章】

- ⑦客観的な属性にもとづくべき型式学的分類に解釈が入っている。
- ⑧各器種の資料数が少なく、数点しかない資料の分布をもとに王朝を単位とする地域性を抽出したり、歴史的状況との接続を試みているが、危険ではないか。
- ⑨分布について検討しているのに分布図がない。

【第2章】

- ⑩最も扱っている資料数が多く、中国在来の青銅製容器である鐎斗を扱った本章を第1章とした方がそれ以降の論旨とうまくつながるのではないか。
- ⑪鐎斗に響銅があるのかないのかなど第1章でふれているのに第2章でふれていない問題がある。

【第3章】

- ⑫青銅製雑器とは何か、最初にきちんと定義する必要があったのではないか。
- ⑬漢代からある青銅製雑器と当該期に仏教の普及に伴うなどして新たに出現する青銅製雑器を区別して論ずる必要があったのではないか。
- ⑭結論が青銅製雑器の特質ではなく、青銅器全体的話になってしまっており、本章の分析を通じて魏晉南北朝時代の青銅製雑器について何が明らかとなったのかがわかりにくい。

【第4章】

- ⑮響銅の定義について、理化学的な分析結果よりも肉眼観察を重視しているようだが、ど

れだけ実物資料を実見した結果なのかがわかりにくい。

⑩魏晉南北朝時代を通じて響銅容器 1a 群とする二元系高錫青銅製容器は輸入しつづけたのか？

⑪当該期に存在する（とりわけ新たにもたらされた）様々な材質の器（うつわ）の中で響銅製容器の出現を位置づける必要があったのではないか。

【第5章】

⑬雑器と水器をわけているが第3章では水器は雑器に分類されている

⑭分析視点に新規性はあるが結論について十分深められていない。

⑮北周の都である長安に中・小型の青銅製容器セットが分布しないのは北周の廃仏政策と関わるのか。

【終章】

⑯前代には見られない熱処理型の高錫青銅製品である響銅が魏晉南北朝時代にいかにして出現し（輸入が始まり）、いつ、どの地域で、どのような器種から模倣が始まりどのように展開したのか、在来の青銅器製作技術との融合はいかにして起こったのかについて、自らの考えを語る必要があったのではないか。また響銅が仏教儀礼の道具立ての可能性があれば、その出現と展開も後漢代に始まる中国における仏教の受容と普及の脈絡の中できちんと位置付けて見通す必要があったのではないか。

以上の質疑に対して、①・②・⑤～⑭・⑰～⑱については指摘の通りであり、補完修正の必要を感じている。③については日本考古学の成果を学ぶことに多くの時間を割いてきたが、今後は日本の東洋史・中国史の成果を積極的に摂取していきたい。⑮については新型コロナウイルス感染症などにより中国へ帰国できない時期があり、実見できなかった資料もある。今後実見をふまえて補完していきたい。⑯については輸入品であると考えているが、改めて検討したい。⑰についてはその可能性はあるが今回は十分な検討が及ばなかった。⑱については資料の分析に注力し、最後に自分の考えを十分語ることができなかった点は反省しており、今後の課題としたい。との回答が本人からあった。

以上の質疑応答を通じて明らかなように、個別の論文における型式学的分析や時期区分、分布の検討などには課題が散見され、それにもとづいて導き出された考察にも検討しなおすべき、あるいはさらに深めるべき部分が多くある。しかしながら、中国魏晉南北朝時代の青銅製容器の悉皆的な集成作業は、日本人研究者はもちろん中国人研究者による先行研究にもみられない徹底的なものであり、当該期の青銅製容器研究の基盤を大きく更新したことは間違いない。また、それにもとづく分析によって導き出された響銅の伝来から在地化までのプロセスや、各時期における南北間の地域性の抽出といった本論文の基本的な結論は首肯できるものである。理化学的な分析結果にも目配せされており、本論文が呼び水となり、さらなる学際的な研究へと展開していく可能性を秘めている。留学後の短期間の間に、このような新規性に富んだ論文を日本語でまとめることができたことは、筆者の高い資質と語学能力を証明するものである。

よって本委員会は、本論文が博士（歴史学）の学位授与評価基準を満たしているものと認める。